
日番谷さんのついてない一日

あさぎ 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日番谷さんのついてない一日

【Nコード】

N4754BA

【作者名】

あさぎ 翠

【あらすじ】

タイトル通り、負けっぱなしな日番谷さんのお話

前編

ピピッ ピピッ ピピッ

不愉快な音がする。

そう思い、俺は音源へ向かって手を伸ばした。

「朝か・・・」

頭と体が重い。どうにか体を起こそうと、うつ伏せの状態から両膝を折り曲げ腕の力を借りて頭を持ち上げようとしたが、その前に布団の魔力に負けた。珍しい。いつも目覚ましが鳴る前には起きるんだが。そう言えば前に目覚ましの音を聞いたのは何時だったか・・・。最近聞いた気もする。そうだ。先週顔を洗っている時に鳴り出して・・・って、それは目覚ましに起こされたわけじゃねえな。

そこで俺はガバリと頭を上げた。時計の針は八時三十分を過ぎている。

「ヤベエッ!」

俺は布団を跳ね除け大急ぎで死覇装に着替えた。飯なんか食ってる暇はねえ。歯と顔を洗い入念に髪型を整え、鏡越しに時計を見ると始業五分前。室内の惨状をそのままに、隊首羽織を羽織り氷輪丸を掴むと走って隊舎と向かった。

なんとか始業前に隊主室に辿り着き、俺は一つ深呼吸して戸を開けた。

「おはようございます、隊長。珍しく遅いですね」

俺はいつも通り眉間に皺を寄せて適当に挨拶を返す。弱みを見せではならない。もしもコイツの触覚に触れたら何が起こるか分かつ

たものじゃないからだ。

席に着き雑多に積まれた書類を仕分ける。今日中、もしくは近日中に処理しなければならぬものは意外に少ない。この程度なら一時間ほどで終わる筈だ。そう考えながら回覧板を眺めていると松本がお茶を持って現れた。

「たーいちよ。なんか眠そうなので、濃い目のお茶にしてみました」
「ん。ありがとう」

途中、聞き捨てならない言葉が挟まれていた気がしたが、深く考えず湯飲みを口に運んだ。

後で考えてみればこの時のこの行動こそが、正に松本の言葉を証明していたのだ。

つまり、俺はボケていた。

「あちっ！」

「あら、大丈夫ですか？隊長」

ゴン バシャ

何も考えずに口に運んだお茶は思った以上に熱く、慌てて湯飲みを置こうとして机の縁にぶつかり中身を自分の膝の上にぶちまけた。
「あっちー！」

「きゃー、大変！！火傷しちゃう。早く脱いで、脱いで！」

「脱げるか、バカッ！」

俺は立ち上がってバタバタと袴を振った。程なくして袴は冷えたが、濡れた布地が膝に張り付いて気持ち悪い。松本に着替えてきたらどうかと言われたが、別に汚い物でもないし何よりも面倒臭い。そのうち乾くだろうと放っておく事にした。

改めて机に向かう。

硯に水を入れ墨を持ち、努めて心を静めた。精神統一をして墨をする。気持ちを落ち着かせなければまともに仕事が出来ない気がしない。

何だって今日はこんなに・・・。

俺は朝からの事を思い出し眉間に皺が寄った。と同時に腕にも力が入る。

ボキッ　ビシャッ　ピシュッ

ああ、なんかもう、いろいろと諦めたほうがいいのか？俺・・・。
朝起きてから小一時間で、これだけの事が起きるってどうなんだよ。
折れた墨が墨汁を弾き飛ばし硯に当たって止まった。机と真っ白い料紙の上に放射状に伸びる墨汁。見れば隊首羽織にも点々と黒い色が飛び散っている。俺は顔にも感じた汚れを落とすため席を立った。

「松本、悪いがコレ洗濯に出しといてくれ。顔洗ってくる」

「はあ・・・」

俺は諦めにも似た長い溜息をついた。トイレで顔を洗い全て落としたか鏡で確認していると、実は顔だけに留まらず、耳や首にまで小さな飛沫が付着しているのが発見された。まあ、隊首羽織も汚れていた事を考えれば首に付くことぐらいちょっと考えれば分かる事なんだが・・・。こんな事なら部屋へ戻って心置きなく洗うんだっ
た。とりあえず目立つ汚れを全部拭い取り、顔を拭こうと懷に手を入れてガツカリした。手ぬぐいが無い。

つくづく寝坊なんてするもんじゃねえな。

俺は開き直って死覇装の袖で顔を拭いた。

そうさ、俺はもともと流魂街のクソガキだ。こんな事で落ち込むほどヤワな神経してねえ！

頭の片隅に居る冷静な自分が、微妙に荒んできたなと思った。

隊主室に戻ると松本は居なかった。羽織を洗濯に出しに行っているのだろうと思い自席へ向かう。机の上は綺麗に拭かれており「墨はすって置きました」と彼女の字でメモが置かれ、椅子の上に替えの隊首羽織が置かれている。時々妙に気が利きすぎなんだよなあ、と独り言ち、その好意に感謝した。

さあ、仕事だ。

ドタバタしているうちに随分と時間が経ってしまった。それでもまあ、昼までには終わるだろう。

昼……。昼かあ。腹減ったなあ。

そう思うと急に胃の辺りがキューツと締め付けられる感じがした。今日はまだ何も口にしていない。朝のお茶ですら未遂だ。

そう言えば前に浮竹から貰った菓子か机の中にあっただはず。

俺が一番上の引き出しの奥から手の平に乗るほどの小さな箱を取り出した。

松本もいねえし、食べながら仕事すつか！

何故そこに松本が関係あるのかというツツコミは捨て置いて、慎重に蓋を開け机の上に置く。今日の短い時間の中で自身に起きた事を考えれば当然の事だ。中身は美しい型抜き和三盆。砂糖であるにも拘らず、控えめな甘さで爽やかな口どけの高級和菓子。一つ摘んで口へ放り込む。

うめえ。

次々と口へ運びそうになる衝動を抑え、とにかく仕事を片付けることにした。

書類を二つ三つ処理する毎に一つ摘む。

そんな事を数回繰り返した後だった。指先が箱の底に当たったの

は。

へ？なんで？

箱を開けた時は指先ほどの砂糖菓子が縦横に四つ三段入っていたはずである。そんな五十個近くある菓子を食べきるほど仕事をした覚えはない。不思議に思っただ菓子の箱を眺めていると、机の向こうから小さな手によきつと生えた。遅れてピンク色の髪が覗く。

「草鹿・・・」

何をしているとは聞かない。菓子を食っているのは一目瞭然だ。

「何時からそこに居た」

いくら仕事に集中していたからと言っても、人が入って来た事に気がつかないとは・・・。

「ひつつん、ずるい」

は？

「一人でこんなに美味しいもの食べようとして」

いや、お前にほとんど食われたが。

草鹿はとぼと隊主席を回り込みこそこそ何かを始めたかと思つと、振り返りにっこりと笑う。

「バツとしてあたしを捕まえられたら、コレ返してあげる！」

草鹿が後ろ手に隠していたものを目の前に突き出すと、すぐさま瞬歩で消えた。

「コラッ、待て！」

草鹿が手に持っていたものは俺の刀留めだった。

失敗した。つい、うっかり、その場の勢いで飛び出してきたしまったが、アレがないと困るということはないのだ。草鹿だって人から取ったものを捨てたり失くしたりすることはないだろう。ただ、遊びに付き合わなかったら返さない可能性はあるが・・・という

事は、結局走り回らなければならないという事か。

はあ……。

溜息がこぼれる。とにかく草鹿を探し出そうと、俺は目を閉じて感覚を研ぎ澄ませた。

チツ、霊圧消してやがる……。

周りを見回せば、隊士たちがぞろぞろと一箇所に向かって歩いていた。そう言えば先程昼休みの鐘が鳴っていたのを思い出す。あの隊士たちは皆食堂へ向かっているのだろう。という事は草鹿も。

俺は急いで食堂へ向かった。

食堂は隊士たちでごった返していた。汁物の匂い、煮物の匂い、焼き魚の匂いが俺の胃を刺激する。鳴りそうな腹を腹筋で無理矢理押さえつけ、給仕に当たっている隊士に尋ねた。

「草鹿副隊長でしたら鐘と同時に見えになられて、あちらでお食事しておられましたか」

隊士が示した方向に草鹿の姿は無かった。そのまま食器下げ口へ視線をずらす。

いた。

「ありがとな！」

俺が人混みを掻き分けて突き進むと、騒ぎを聞きつけた草鹿は一瞬目を合わせ、笑顔で手を振って逃げ出した。

何とか食堂から脱出した俺は、屋根の上で途方に暮れた。無駄に広範囲に移動している草鹿の霊圧を感じたからである。

何と言うか……動きたくねえ。

食堂で刺激された腹がぐうと自己主張してくる。

……飯食おう。

別に急いでいるわけではないのだ。そう思って立ち上がったところで、今日の俺の運の無さを思い出した。

地獄蝶が飛んでくる。間違いなく俺に向かって。

中編

地獄蝶に呼び出されて総隊長の元へ向かった俺は現世へ行くよう命ぜられた。内容は、浦原喜助に手紙を手渡すというもの。何で俺が、とは思ったがそこはお役所仕事。上司の命令は絶対である。しかも今すぐに立出しなければならない。従って俺の昼飯はお預けとなった。

隊主室に戻り、氷輪丸を取り上げる。鞘から垂れ下がる肩紐が少し切ない。俺は昔のように刀を背負うと胸元で紐を結んだ。

「松本、少し現世に行ってく・・・」

「私も行きたいです!」

人の台詞を食うんじゃねえ。

「ダメに決まってるんだろ」

「どこら辺がですか」

「そこだ」

と、俺は松本の机の上を指差した。朝から微塵も動いた形跡が無い。

「すぐに戻るから、たまには片しとけ」

「ずるゝい」「隊長のケチ」という松本の声を背中で受け流し、

俺は穿界門へ向かった。

穿界門を抜けると、そこは虚の群れの前だった。

唖然としたのも束の間、虚は一斉に俺の方へ顔を向ける。その口の中は赤い光に満ちていた。

「縛道の八十一、断空」

咄嗟に張った障壁の向こうで、虚閃が弾ける。

「いやあ、お見事っす。日番谷さん。それで今日は総隊長のお使いですか?」

浦原がいつもの胡散臭い笑顔で現れた。左手で帽子を押さえ、後方へ刀を一閃させる。虚が一体消し飛んだ。

「そうだが……。何があつたんだ、この状況は」

「それじゃ、頂けますか？お手紙」

無視か？俺の質問に対する答えは無しなのか？

何か釈然としないものがあつたが、言われたとおり手紙を差し出した。浦原はパリりと手紙を開いて読み始める。代わりに俺が氷輪丸を抜き、襲い来る虚の相手をした。遠くの方で浦原商店の子供たちが戦っているが見える。

「日番谷さん」

「なんだ」

「ちよつとお返事書いてきちゃいますので、この場をお任せしますね。ああ、ジン太とウルルは置いていきますから」

「なっ……」

何で俺が！と言いつうになつたが、そもそもこれは死神の仕事だ。出そうになつた言葉を飲み込んでみると、浦原は余計な一言を言つて姿を消した。

「現役の隊長さんですもん。このくらい朝飯前つすよね」

その言葉は俺のささくれた心を逆撫でするのに十分だった。

ああ、そうさ。今日の俺は、昼飯どころか朝飯も食つてねえ！

「霜天に坐せ」

俺の周囲にユラリと霊圧が立ち昇る。

無駄に霊圧を上げているということは分かっている。だが、この時の俺は本気^{マジ}だった。

「氷輪丸！」

蒼い龍が、俺の心を代弁するかのように虚を貫き通していく。同時に俺自身も虚の群れの中に突っ込んだ。

十数体いた虚も本気を出した俺の前では一溜まりもない。

目の前の虚の消滅を確認したところで俺は氷輪丸を背中^中の鞘へ戻した。浦原商店の子供が手持ちのワザを叫ぶ声がする。これで最後の虚も片付いたはずだ。僅かに気が緩むと途端に疲れが押し寄せて

きた。ダメだ。いつもと違ってパワーもスタミナも全然足りねえ・・。

「よけろ！チビー！！」

「チビじゃねえ！」

反射的に叫びながら声のした方へ振り向けば、その子供の得物が眼前に迫っていた。

「しかしまあ、大した怪我じゃなくって良かったすよ。ジン太も今後は気をつけなさいね」

「お、俺だって、ワザとじゃねーし。手が滑ってすっぱ抜けちまうなんて思わなかったんだからよお」

「だからそれを気をつけなさいと言ってるんです。日番谷さん、本当にすいません。今テッサイも所用で出かけててロクな治療も出来ないんです」

ああ、本当にツイてねえ。と言うか、コレは俺がマヌケなのか？
少なくともあの言葉でカツとなってしまうのは俺の負けなんだろう。
あの後、あのガキの飛んできた得物を避けきれず、中途半端に腕で受けようとして手首に当たってしまった。結果として手首は腫れ上がり、今現在氷嚢で冷やされている。まあ、二、三日くらいはまともに刀を握れないかも知れないが、多分筆は持てるだろう。持てなければ・・・松本に仕事させればいい。

「それはいい。本当に大した事じゃねえから。それより総隊長への返事、出来てんなら貰うぞ」

俺は浦原から手紙を受け取り、早々にその場を辞した。

総隊長へ手紙を渡した後、俺は草鹿の霊圧を探った。草鹿の霊圧は簡単に見つかり動く気配がない。今がチャンスとばかりにその場

へ向かうと、更木と木陰で昼寝中だった。どうしたものかと途惑っている、更木が訝しげに片目を開いた。

「何か用か？」

「いや、実は草鹿が・・・」

俺は草鹿が俺の刀留めを盗って逃げ回っていた事を説明した。更木の視線が俺の胸元に止まる。

「おい、やちる。鬼ごっこはおめーの負けだ。さっさと返してやれ」そんな言葉で目を覚ますのか？と思っていると、草鹿は片手で目を擦りながらムクリと起き上がった。反対の手は懷の中を搜索している。

「あれれ？」

草鹿はぱっちり目を開いた。まさか・・・、まさかと思うが・・・。

「ない！」

俺は自分の不運に呆れ返った。無きや困るものではないが、それなりに大切にしてきた物だ。それ相応の落胆はある。

「着物脱いでみる」

「うん、わかった」

草鹿が袴の帯に手を掛けた。

「待てっ、そこまでしなくていい！っていつか脱がせるな。仮にも女なんだぞ」

「まだガキだぞ？」

「それでもだ！草鹿も人前で簡単に着物を脱ぐんじゃねえ」

「でも剣ちゃんと一緒に風呂入るよ？」

「ここは風呂じゃねえだろっ」

はぁ。疲れる。誰かこいつ等に常識を教えてやってくれ・・・。
「とにかく。刀留めは見つかったら返しに来てくれればいい。俺もそこら辺を探してみる」

太陽が西に傾いてきた。心なしか色も橙色だ。探すなら急いだほ

うがいい。

俺は屋根より少し高い位置から瀟霊廷を見渡した。昼に草鹿が逃げ回っていた範囲は・・・、広すぎて皆目検討がつかねえ。しかも俺が現世へ行っていた間も行動しているのだし、草鹿に菓子^{エサ}をやりたがる人間は瀟霊廷の端から端まで存在する。いや、寧ろ端と端か？ そんなことはどうでもいい。

俺は自分の思考に突っ込んで、改めて瀟霊廷を見回した。何やら騒ぎが起きている。何番隊なのか、端から順に数えてみる。

・・・うちの隊か？ しかもあの辺りって・・・

俺は嫌な予感に襲われながら騒ぎの起きている場所へ向かった。近づくにつれ先程の予感は確信となる。

やっぱり俺の部屋の前じゃねえかよっ！！

俺は騒ぎの只中へ飛び降りた。

「どうした」

「日番谷隊長」と隊士たちが次々に口を開いた。

「実はこの者が庭の掃除をしていたところ、池の水が中心から徐々に凍りだしたと申しまして。知らせを受けました我らが様子を見ていたのですが、確かに氷が大きくなっているようです」

「池？」

この庭に池は一つしかない。隊士たちが左右に割れて池までの道ができた。池は然程大きくはなく、石がその周囲を囲んでいる。俺はその石の一つに立ち池の中を見た。なるほど、確かに池の中心が凍っている。はつきり言おう。こんな自然現象はない。では何が起きているのか。十二番隊の陰謀か。松本の悪戯か。いずれにせよ、この氷の発生源が答えを出してくれるはずだ。

俺は池の中に手を入れた。水は身を切るほどに冷たいが、まずはあの氷を溶かさなければならぬ。

「少し下がっている」

赤火砲の応用で威力を極力抑える。対象物を爆破炎上させるのではなく、温度を伝え溶かす。そんな集中力を要する作業を数分行っ

ていると、だいぶ氷が溶けてきたようで、周囲からざわめきが聞こえてきた。

そう言えば赤火砲を手元で爆発させていたヤツがいたな・・・つてヤバッ！

ボンツバザツ

ザアア

ドボン・・・

余計な事を考えたのが悪かった。鬼道は余計な方向へ修正され爆発し大量の水を噴き上げた。その水は雨のように周囲に降り注ぎ、爆発の振動で地盤に僅かなヒビが入り

「のわっ！」

俺は足場の石ごと池の中に落ちた。

「隊長っ、大丈夫ですか！」

情けない、というよりも今は恥ずかしい。何やってんだ、俺・・・。

「大丈夫だ。何でもない」

努めて冷静を装い立ち上がる。池は意外に深く、腰の辺りまで水に浸かった。そのまま池の中心まで行って問題の発生源を取ろうと手を伸ばした。

・・・届かない。

当然だ。足より腕が長いはずが無い。俺は息を吸い込み勢いをつけて水中に潜った。どうせ一度は池に落ちたのだ。一度やるも二度やるも同じ事。

そうして水から上げた発生源は周りに大きな氷を張り付かせてはいたが、間違いなく俺の刀留めだった。

はあ・・・

心の中で盛大に溜息をついた。

怪奇現象の正体が自分の刀留めだったとは。

俺がいつも持ち歩いていたものだから、霊圧を蓄積していたのだろっ。それが相性のいい水の中で、遺憾無く発揮されてしまったの

か。

「誰か、十一番隊の草鹿副隊長に伝言を頼む。探し物は見つかったと」

俺は池から上がると氷輪丸を下ろし、柄頭で刀留めについている氷を叩き割った。とにかく無事見つかって何よりだ。

池の騒動も収まり、とりあえず俺は風呂に入った。流石に池の水は臭く、人前に出るのも憚^{はば}られる。

風呂の中でも湯と水を間違えたとか、シャンプーが無くて石鹸で髪を洗ったとか、湯船の湯が熱かったとか、我慢していた手首の腫れが湯の中でジンジン痛んだとか、不運なのかなんなのか良く分からない事はあったが、数えてみても仕方が無い。

そんな事より今日中に処理すべき書類を終わらせてしまわなければ。

俺は髪も体も適当に拭き急いで着替えて隊主室へ向かった。

「帰ったぞ、松本。仕事したか？」

「お帰りなさい。仕事しましたよーって、何があったんですか？！」

松本は俺の姿を見るなり、目を丸くした。

俺は別に変な格好をしているわけではない。髪が洗いざらしなのと隊首羽織を着ていないだけだ。

「風呂に入ってきただけだ」

「そんな事、見れば分かります。風呂に入った理由を聞いてるんです」

「汚れたからだ」

「どうして？」

だー、しつこい！絶対言うもんか！

俺と松本は暫らく睨み合っていたが、こういう事で松本の口に勝った事は無い。よって、逃げる事にした。

「時間が無い。仕事する」

俺は席に着き残りの仕事を確認する。昼前と比べて少し量は増えていたが捌けない量じゃない。

さっさと終わらせて何か食って寝よ。

既に空腹かどうかなんて分からない。だが何となく、何かを口にしなければ明日はまともに動けないような、そんな予感がする。

そんな事を考えながら、俺は黙々と筆を動かした。

「隊長、なんか眉間の皺がいつもの三割増しですけど、どうかしたんですか？」

チラリと見ればソファの背もたれに両手を乗せ、その上にアゴを乗せている松本と目が合った。

「ヒマなら仕事しろ」

「だから終わりましたって」

「明日、明後日の分をやったっていいんだぞ」

「それも終わっちゃいました」

なんだよ、そのスピードは。つか、いつでもその位やれよ。

「隊長がなが〜い時間、現世で遊んでる間にぜ〜んぶ終わらせちゃいました」

あきらかに不貞腐れてる。

この女、自分の事を棚に上げやがって・・・いや待てよ。

「それは好都合だ。俺の分を分けてやる」

ヒクリと松本の顔が引きつった。おもしれえ。

だが残念な事にこの時終業の鐘が鳴り響く。

「あゝら、残念。それじゃ隊長、あたし今日は京楽隊長と約束があるのでお先に失礼しまあゝす」

チツ、逃げられたか。

いや、返って好都合か・・・。

俺は筆を置いて右手首を押さえた。思ったよりも熱い。

いってえなあ。仕事すんの止めちまうか。今日の分は終わってるし。

俺はフラフラとソファに近付くと、うつ伏せに倒れこんだ。体がソファに沈み込みそうな感覚に襲われる。

なんか俺、結構疲れてんなあ。まあいいや、ちょっとだけ・・・。
俺の瞼は自然に下りて、あっという間に意識を手放した。

後編

目が覚めると自室の布団の中だった。

何か嫌な夢を見たような、夢にしてはリアルだったような。

そんなことをぼーっと考えていると物音が聞こえてきた。何事だ
と思い起き上がると手首に鋭い痛みが走った。

「いつてえ・・・」

咄嗟に押さえた手首には湿布と包帯が巻かれていた。手首の怪我
には覚えがある。そこでやっと寝ボケていた頭がはつきりした。だ
がしかし、湿布をした覚えは無い。

「隊長、起きました？」

襖が開き松本が顔をだした。

「松本、何でお前がここに・・・」

「さて、何ででしょう」

松本が凄じ顔で笑った。こういう顔で笑ってる時の女は怖い。

「まあ、とりあえずこっちの部屋に来てくださいよ。いいものあり
ますから」

とりあえず黙って従う事にした。

部屋に入ると、どこからともなくいい匂いがして俺の腹は空腹を
思い出したかのように鳴り出した。羞恥に顔が熱くなるのが分かる。
松本は両手を腰に当て仁王立ちしながら呆れた顔をしていた。

「まずはコレ飲んじやってください」

渡された湯飲みの中には嫌な色をした液体が入っていた。

「薬湯じゃねーか。なんでこんなもん・・・」

「いいから黙って飲むっ！」

俺なんかしたか？何で怒られなきゃなんねえんだよ。

俺は松本と薬湯を数度見比べ、息を止めて一気に飲み干した。口
に広がる苦味と、舌に残る甘さが何とも言えず不味い。

「これでいいのか」

「はい。良く出来ました」

今度は微笑まれる。いったい何なんだと思っていると、机の上に所狭しと食べ物が並べられた。肉、魚、煮物、握り飯に漬物まで幾つもの折り詰めに入れている。

「飲み屋で詰めてもらっただんです。まだそれほど冷めてないですから、早く食べちゃってください」

俺は暫らく呆然としてから正座して両手を合わせた。握り飯を手に取りかぶりつく。なんだかとても美味かった。

「そういえば、お前、今日は京楽たちと・・・」

「ええ。今朝の隊長のドジ話を肴に飲んでました」

「おめーなあ・・・」

松本が割った割り箸で魚を一口サイズにほぐし、持ち手を俺の方へ向けて置いた。ありがたくそれを食べる。

「京楽隊長が、『その様子じゃあ、朝ご飯は抜きだね』って。そしてたら修平が、昼休みに食堂に来た隊長が、やちるを追いかけて凄い勢いで出て行っただって言うてましたよ。何してたんですか」

「・・・」

見られて・・・るよな。あれだけ人波掻き分けて追いかけてたんじゃないあ・・・。

「昼休みが終わる前でしたから、そのすぐ後ですよ、現世に行くって言うてたの。飲みに行く前にもうちの隊士に『隊長が池に落ちたんですけど大丈夫でしょうか』って聞かれましたよ。ああ、もちろん大丈夫って言うておきましたけど」

松本がきゅうりの漬物を一つ摘んだ。そしてずっとお茶を飲む。「それで、どう考えても朝昼何も食べていない隊長が、夕食も摂らずに仕事してるんじゃないかってみんなの意見が一致して、あわててお土産持ってきたんですよ」

返す言葉も無い。概ねその通りだ。

「そしたらどうです？」

「まだ何かあんのかよ」

「隊長ったらソファで倒れてるし」

「あ、あれはちょっと・・・仮眠を取ってただけだ」

「ウソおっしゃい！仮眠を取ってるだけの人が、起こされても運ばれても気が付かないなんてことがありますか！」

「えっと・・・」

「あたしが運びました。あたしだって子供くらい運べます」

「っ・・・」

ぐうの音も出ない。た、確かに俺は、こ、こ、こど、も、だ。身体的には！

俺は下から松本を睨みあげたが、松本は母親のように素で受け止めている。

だめだ。勝てねえ。

俺は反抗期の子供のように足を崩して胡坐をかいた。悔しくなつて筍の煮物を口に放り込む。是非あやかりたいものだ。

「それに手首は真っ赤に腫れてるし、寝てても痛そうにしてるし。慌てて四番隊に行つて湿布貰ってきたんですから。よくこんな状態で筆持つてましたね。理由は聞きませんから、明日ちゃんと四番隊に行つてくださいよ」

俺はそつぽを向いて茶をすすった。渋みの後に爽やかな甘さが広がる。

ああ、美味い。

チラと松本を見れば、もう、と唇を尖らせていた。

ザマミロ。いつまでもおまえのペースに乗せられていると思うな。俺が半分開き直つて子供のような態度に出ると、松本は机に身を乗り出し落ち着いた声で問い掛けてきた。

「ねえ、隊長。本当は朝から調子悪かったんじゃないですか？」

「は？」

「その顔だと気付いてないんですね。さっき測つてみたんですけど三十七度六分もありましたよ」

新手か？押してダメだから引いてみたのか？つか、いつの間に測

ったんだよ……。

「朝寝坊したのも、力加減が分からなくて墨折っちゃったのも、鬼道でポカミスしたのも、みんな本調子じゃないからだと思ひますけど」

ポカミスって……まるで見ていたかのように言うじゃねーか。

今度は俺が口を尖らせた。

「という訳で薬湯飲んでもらいました。さあ、ちやつちやと食べちゃってください」

「いや、もう食べねえ」

腹いっぱいだ、と言って俺は腹をさする。

「じゃ、片付けますね。隊長はさつさと寝て本格的に風邪引く前に治しちゃってくださいよ。隊長が元氣じゃないとあたしが困るんです」

松本は手際よく机の上を片付けた。そして鼻歌を歌いながら湯飲みを洗うと、俺が食べ残した折り詰めを持って立ち上がる。

困る？何が困る？人の失敗談を酒の肴にするようなヤツが何を困る？

「さつてと、飲み直して来よ。あ、隊長、あたし明日非番なんで、本当にちやつちやと治しちゃってくださいね」

俺は松本が部屋から出るのを呆然と見送った。我ながら反応が遅い。

「……そーゆーことかよ……」

非番明け、覚えてやがれ。

今日が終わるまで約三時間。これ以上何か起こっても対処する気力は無い。

「寝よ」

俺は寝巻きに着替えて布団に入った。

満ち足りた気分で寝入ったのは秘密だ。

後編（後書き）

こちらでは初めて別ジャンルを書きました。

『初めまして』の方も多いかも知れませんがね。

あさぎと申します。以後お見知り置きを。

さてさて活動報告にも書きましたが、日番谷病が5年ぶりに再発して（2006年に作成したファイルがPCに残ってた）日夏にズキユーンと胸を撃ち抜かれてしまい、短編にしようと思っていたネタの一つを吐き出したのですが。

何この長文・・・短編じゃないじゃない。

しかも約10年ぶりの一人称で（これもファイルがあった）妙に説明文っぽくなってしまってるし。

いや、でも、日番谷いじめは楽しかったですが。

すいません。私の思考回路はこんなです。基本ギャグっぽいのか書けません。

しりあすとかアイとかコイとかいうのは多分きつと書けないと思います。

こんなのでよろしければ、また読んでやってください。

そう言えば「筍」のくだり、分かりました？

お若い方には分からないかもしれないかもしれませんよね。あれ、一応、笑うところですよ。

筍は成長が早いんです。

最後になりましたが、ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます。
ございます。

ご感想などありましたらよろしく願います。

20120114

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4754ba/>

日番谷さんのついてない一日

2012年1月13日20時53分発行